
暇人魔族と淡藤色の魔法陣

鬼灯 更紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇人魔族と淡藤色の魔法陣

【Nコード】

N5563P

【作者名】

鬼灯 更紗

【あらすじ】

魔王様の魔力で豊かになった魔界。わざわざ地上に行かなくても自給自足が可能になり、地上の人間との関わりもなくなった。そんなある日、珍しく召喚の魔方陣を見つけた魔族の一人は、ちょっとした好奇心から召喚に応じてみる事にした。

暇人だった魔族（趣味：料理と園芸）と魔法学院に通う奨学生の物語。

当代勇者は魔王様！？の派生です。

一話（前書き）

自重できずに魔王様の派生物です。

学園系になるかなあ。

片割れは魔族なので色々ぶっ飛んでいます。

一話

知り合いの悪魔族の所で、新しく品種改良した植物だの自家製の果物で作った果実酒だのの話をしていた時、不意に珍しい物を見つけた。

淡い藤色に輝く、かなり控えめな召喚の魔法陣。人間が、悪魔の力を借りようとする時に出現する物。ここ暫く見てなかっただけに、えらく新鮮に見えた。

今まで人間が悪魔を召喚する時は、自身の裁量で召喚可能な最上位の者を望むからか、こっちに現れる魔法陣は目に付きやすい様にか派手な色が多かったし、自身の魔力を誇示するべく離れていてもわかるぐらい魔力を放出していた。しかし、今出現している魔法陣は目立たない控えめな色合いだし、魔力も陣を維持するのが精一杯といった風情。

「……なんだ、こりゃ？」

「召喚の魔法陣だろう、如何見ても」

「いや、そりゃわかるよ。けどさ、こんな全然自己主張してない魔法陣初めて見たよ、オレ」

オレの言葉に、知り合いの悪魔族も確かにと頷いている。何度か人間の召喚に応えた事があるから、この魔法陣が如何に奇妙か、オレもこいつもよくわかった。

「てかさ、魔王様が魔界豊かにしてくれたおかげで召喚に応える必

要性なくなつて、無視し続けてたからいつの間にか魔法陣見かけなくなつたよね？」

「……そうだな。わざわざ面倒な事をしなくとも、極上の魔力や精気が簡単に手に入るからな」

そう、今の魔界は当代の魔王様の魔力が隅々まで行き渡つて染み込んでるから、ここで育つた植物は魔力を豊富に含んでるし、魔獣達も手強くなつたけど苦労して狩る甲斐は十二分にあるぐらい肉質も味も良くなつた。つまり、わざわざ人間界に行つて人間襲つたり家畜襲つたり山野の獣襲つたり、召喚に依えて面倒な願い事を叶えてやつたりしなくても、魔界で十分自給自足が出来るようになった訳だ。

悪魔族は腹減つたと思えば大気に満ち溢れてる魔力をちよつと摘めば良いし、吸血鬼族は悪魔族みたく空気中の魔力をそのまま摂取するのは出来ないけど、各集落の井戸の水とか、そこらの川の水を飲めば良い。豊富に含まれた魔王様の魔力がすぐに飢えを満たしてくれる。しかも味は極上だ。当たり前れの激しい人間の相手をするなんて馬鹿馬鹿しくなる。

魔王様が肉や野菜を調理した物を好むと知つてからは、悪魔族と吸血鬼族はあれこれと様々な野菜や果物を品種改良で生み出し始めた。ちよつとあの熱意は同族のオレでも軽く引いたよ。すげえんだもん、あれ。

ともあれ、最初は魔王様の為につて始められた農業だつたけど、いざやってみると楽しくてハマつた奴らが意外と多くて——かく言うオレもハマつた一人だけど——今では農業を楽しんでる。まあ人間みたく汗水流してえんやらや、なんてしてないけど。耕すのも水遣りも魔力で出来るし。

主食が精気か魔力なだけで固形物が食べれない訳じゃないし、魔界で育つた作物は味もそうだけど魔力を豊富に含むから、自分で育

てた物を食べるのが最近の悪魔・吸血鬼一族の習慣だ。

って、話がそれた。

まあそんな感じで、苦勞して人間と関わって時に割に合わない思いをしなくても、ちよつと頑張れば確実に美味しい食事にありつけるから、人間と関わる奴らはどんどん減ってた。人間の方でも、俺達が応えなくなった事に気付いたみたいで、ここ最近は召喚の魔法陣を見なくなってた所に、これだ。

しかも、今まで見たいに自己主張の激しい魔法陣じゃない。明らかに異色の奇妙な魔法陣。

「うん、ちよつと行ってくる」

「……力量的に釣り合んだろう」

「ダイジョーブ。だってオレだし」

「は？……ああ、そうか。そうだな」

本来なら、こんな魔法陣じゃオレやこいつみたいな高位魔族を召喚するなんて夢のまた夢だけど、オレはちよつと特殊だからこの魔法陣を通って召喚に応える事が出来る。元が高位だから、契約で縛るのは無理だけど。まあ単にこの魔法陣作り出した魔術師に興味があるだけで、契約するつもりなんてないから、そこらはオレには関係ない。

「じゃ、いつてくるな」

「騒ぎは起こすなよ」

「兄貴に怒られるような事はしないっつーの！」

笑顔で怒るからかなり怖いんだぞ、うちの年の離れた兄貴は。

とんでもない軽口をくれたそいつに言い返して、オレは気軽に魔法陣に足を踏み入れた。慣れた召喚特有の転移を感じつつ、まだ見

ぬ魔術師をあれこれ想像してみる。

力量の差もわからない三下だったら、ちょっと記憶を弄くって忘れてもらって、地上観光してから帰ろう。兄貴の嫁さんに、まだ魔界にはない香辛料とか香草とか、地方特有の料理のレシピとかをお土産にするのもいいかもしれない。色々お世話になってるし。

地上に出るのも久々だし。ふふ、たーのしみ。

一話（後書き）

魔王様の続編はスランプで微妙に止まっております。

こっちは魔族の彼がよく動いてくれるから書きやすかった。

二話（前書き）

早々と二話目。

片方スランプだと別の方はすらすら行くようです。
魔王様もネタだけはあるんだけどなあ……

二話

どうしたもんだらうと、召喚主を見下ろして考える。

召喚されてきたオレを見た瞬間、それはそれは嬉しそうに笑った召喚主である女の子はそのままその場に倒れこんだ。咄嗟に受け止めた身体は軽いし、手も足も皮と骨って感じでかなり細い。つーか、ぶっちゃけガリガリ。本人に言うつもりはないけど、召喚された直後は死人に呼ばれたのかと素で思ったぐらいだ。

潜在魔力はデカそうだけど、半覚醒にすら至ってないようで顕在魔力自体は随分小さいし、精気自体も弱い。とりあえず、何時までもこんなあばら家って感じの所に女の子を放置する訳にもいかない。

抱き上げた身体はやっぱり軽くて、小さくて、今までオレを召喚するのは全員成人してたし、精気に満ち溢れてたから新鮮でもあり、このまま起きずに死ぬんじゃないかってちよつと不安になる。

「んー……とりあえず、飯かなあ」

人間は、朝昼晩に三食食べるのが普通で、条件不足で食べられなくても、何日も食べてないと死ぬ生き物だ。この女の子の衰弱具合から見て、十分な食事をとってないのは明らか。召喚された理由もわかってないのに死なれたらつまらないし、見捨てたなんて兄貴にバシたら半殺しじゃすまない。八割方殺されるよなあ、確実に。兄貴容赦ないし。

あばら家の一角に、多分女の子が整えたんだらう部屋があった。他の部屋より埃が少ないし、床もちゃんとある。薄い毛布と所々ほ

つれた寝袋、干し肉や干し芋の欠片に、中身が殆どない水袋もあった。使い魔に新しい寝袋と毛布を取ってこさせて、ついでに起きるまで見てると言っておく。その間にオレは一回魔界に帰還。前に魔王城の厨房に飛んだら怒られたから、今日はちゃんと門から入った。

「エレノア義姉さ〜ん」

「……何だ、アルアか」

「久しぶり〜。あのさ、骨と皮だけって感じの人間の女の子に召喚されたんだけど、何食わせりゃいいかな？肉とか魚ってまずいんですよ？」

また面倒事に首を突っ込んだのかとか言いながら、エレノア義姉さんは見事な包丁捌きで幾つかの野菜を一瞬で細切れにした。義姉さん、アデイス將軍と剣で渡り合えるんじゃないの？軌道が途中で見えなくなっただけですけど……。

微塵切りをさらに微塵切りにして小さめの片手鍋に入れて、そこに大鍋から美味そうな良い匂いのするスープを注ぎ込んで蓋をして火をつける。魔王様の髪の色みたいに真っ黒な布を被せて、待つ事一分。布と一緒に蓋を開けると、いい感じに煮込まれた野菜スープができていた。

蓋の上に被せた布、魔王様が急いでる時とかの煮込み時間短縮の為にって時間経過を早める魔法を込めて作ってくれたらしい。ぶっちゃけ、兄貴が贈った物より大事にしてたりするもんだから、たま〜に兄貴が複雑そうな顔をしてるのをオレは知ってる。

「ほら、持っていけ。いいか、一気に食べさせるなよ？最初は器に一杯分だ」

「りょーかい。義姉さんありがとね〜」

「……イデアに迷惑かけるなよ」

「あはは、だいじょぶだよ。……多分」

ってか、迷惑かける前に察知した兄貴が迷惑事ぶっ飛ばしに来そうで怖い。わあ、すげえリアルに想像出来た。にこやか〜に微笑みながら背後に大魔神背負ってる兄貴。……うん、怖すぎる。

地上に戻ると、女の子はまだ寝てた。寝袋が微かに上下してるから、死んではないっぽい。目の下にくつきり隈が出来てるんだけど、ひよつとしてオレを召喚出来るまで不眠不休で召喚試してたりしたのかな？

使い魔達に魔法陣のあった部屋を調べに行かせたら、人間が魔法陣を描く為に使う道具を持って帰ってきた。特定の水晶を砕いて作るもので、破片が細かい物ほど少ない量で魔法陣が描ける。袋の縛り口に付着してた破片は砂粒ぐらいの細かさだったから、それがこの袋一杯にあったなら魔法陣十個分てところだろうか。

「はい？幻獣や精霊召喚の魔法陣？」

別の使い魔の報告に、オレ自身の片目と使い魔の目を一時的にリンクさせる。

見たのは、確かに幻獣や精霊を召喚する為の魔法陣で、どうやらこの女の子、使い魔契約が出来る存在を召喚したかったみたいだ。何故か全部どこかしら間違ってた失敗してるけど。

「それで何で悪魔召喚の魔法陣になるのかねえ？」

幻獣や精霊を使い魔にすると、悪魔を使い魔にするのじゃ随分違う。前者は少量の召喚主の魔力と地上の食べ物で長期契約できるけど、悪魔と長期契約を正式に結ぶのはよっぽど魔力と精気に満ちてないと無理だ。何せ一回働く事に等価交換で精気や魔力を要求するのが今までの悪魔の普通だから。過去、調子に乗って頻繁に使役

したお馬鹿な魔術師は干乾びて死んだらしいし。まあ人間の時間で言えば悪魔が召喚に感じなくなって久しいのかもしれないから、そこら辺を忘れてるって可能性もない事はないと思うけど……。

「……悪魔召喚だつて知らなかった、が正解な気がする」

すやすや、眠る女の子を見てそう思う。だつてオレが召喚されて来たのを見て、すごくホツとしてたし嬉しそうだった。

さて、どうしたものでろう。義姉さん特製スープは冷めない様に魔法かけてあるから大丈夫だけど、問題はオレとこの子の関係だ。正式に契約した訳でもないし、この子の実力じゃそれは確実に無理。とりあえず起きたら理由を聞いて、面白そうだったら付き合ってもいいだろう。

そう決めて、オレは起きるのを待つことにした。

二話（後書き）

実はイデアの弟でした、アルアくん。

エレノアは義姉であり料理の先生です。

習ってる時は背後に常に兄貴がいたとかいないとかw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5563p/>

暇人魔族と淡藤色の魔法陣

2011年1月19日22時19分発行